【369】

氏　名（本籍）	土屋裕睦（つちやひろのぶ）（岐阜県）
学位の種類	博　　士（体育科学）
学位記番号	博　乙　第　2519　号
学位授与年月日	平成22年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ソーシャルサポートを活用したスポーツカウンセリング －大学生アスリートのバーンアウト予防－

主　査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中込四郎
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	野津有司
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	坂入洋右
副　査	筑波大学教授	医学博士	小玉正博
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	外山美樹

論文の内容の要旨

（目的）

本論文では、スポーツカウンセリングにおけるソーシャルサポートの活用法について、大学生アスリートのバーンアウト予防に焦点をあてながら実証的、実践的に検討することを目的とした。そして、この目的を達成するために大きく3つの下位検討課題を設定し、それらの課題に対して、それぞれモデル設定、質問紙調査、事例検討といった独自の分析枠組みに基づき検討した。

（概要）

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

1）ソーシャルサポートの構成要素とその機能（検討課題1）

新たに24項目からなるアスリート用ソーシャルサポート尺度を作成した。大学生アスリート390名を対象に実施された調査資料に因子分析を施し、「理解激励サポート」「尊重評価サポート」「助言指導・情報提供サポート」「娯楽共有サポート」の4因子を同定した。さらに、これらの構成要素について、スポーツカウンセリング事例における相談過程でクライエントより語られた内容をソーシャルサポート（以下、SS）に注目し再分析した。その結果、アスリートの享受しているSSには、機能的側面からみると情緒的SSと道具的SSがあり、さらに行動的側面からは直接的SSと間接的SSに分けられることを明らかにした。

2）ソーシャルサポートのストレス緩和ならびに抑制効果の検討（検討課題2）

大学生アスリート457名に質問紙調査を実施し、バーンアウトの程度より、ストレスレベルとSSの満足・不満足との関連を検討した。その結果、SS満足群のバーンアウト傾向は、いずれのストレスレベルにおいても有意に低く抑えられており、SSのストレス緩和効果を実証した。また、大学新入運動部員76名を対象として、入部直後から約2ヶ月ごとに、合計4回の縦断的な調査を行い、SSのバーンアウト抑制効果を確かめた。さらに、本対象者の中から8名の協力者を得、面接調査を継続した。ここでは提供されるSSの時系列的変化に注目し、「競技生活の戸惑い」といった競技ストレスに直面することの多い入部直後の時期で

は「情報提供サポート」が、そしてその後は「尊重評価サポート」や「娯楽共有サポート」がバーンアウト予防にとって有効であることを明らかにした。

3）ソーシャルサポート活用プログラムの開発（検討課題3）

SSの獲得を動機づける教育プログラムを独自に作成し、大学新入部員に提供した。本プログラムは構成的グループ・エンカウンターを理論的拠り所として、大学アスリートの競技ストレスへの対処に役立つエクササイズを組み入れ、6セッションから構成された。本プログラムの参加により自己開示行動の活発化、自己受容の促進、サポートネットワークの形成がなされ、バーンアウト傾向の抑制効果を確認した。さらにまた、試合期にある競技チームに対して、チームワークの向上ならびに試合場面での実力発揮を目的として、先に開発したプログラム内容に加筆修正を施し提供した。その結果、チームメンバーのモラールや自己開示の向上的変化ならびに大学対抗競技会でのチームや個人成績の上昇を認めた。本プログラムに参加したアスリートのセッション中の発言内容や作業シートに記載された事項を手がかりに、チームビルディングのプロセスを検討したところ、SSの活性化が介入による種々の効果に強い影響を与えていたことを明らかにした。

（結論）

以上の検討を踏まえ、「ソーシャルサポートに着目することで、これまでアスリートと1対1の関係で展開されてきたスポーツカウンセリングの実践において、グループの教育機能を活用した新たなアプローチを具体的に提示することができた」と結論した。

審査の結果の要旨

本論文は、ソーシャルサポートのバーンアウト予防や抑制効果を実証し、さらにソーシャルサポートの活性化を柱としたグループアプローチによる教育・予防的活用の有効性を明らかにした。それによって新たなスポーツカウンセリングの展開ならびに心理支援の対象の拡大をもたらせたことになり、高い評価が与えられる。また本論文で提示されたプログラムの骨子は、スポーツ種目ならびに集団の多様性に対しても耐えうるものであり、今後、現場でのこの種の試みに貴重なモデルとなることが期待できる。さらに本論文は、設定された各研究課題に対して、仮設モデルの設定、質問紙調査による実証、そして事例による確かめといった一連のアプローチによって、臨床的リアリティを高め、当初提示したモデルのさらなる精緻化をもたらせている。このようなことから、応用実践を標榜する体育・スポーツ学領域における研究アプローチの実際としても本論文の中で展開された研究方法は価値を有すると考える。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。